

シベリア抑留の俳句・川柳・短歌

香川県 光 藤 篠 之

(俳句) 二十五句

遠き日の列車の引揚港は時雨けり
ラーゲルに生きて銀杯屠蘇を酌む
方言にもどる戦友初電話
ラーゲルの吹雪く点呼に目覚めけり
ラーゲルや雪の木を伐る夢いまも
引鶴に託すラーゲル鎮魂歌
ラーゲルの飢餓しみじみと蓬摘む
ラーゲルのその後は知らず鶴帰る
ラーゲルの夢をいまだに柏餅
ラーゲルのパンの追憶明易し
梅雨空に戦後終らじ傷疼く
捕虜たりし証の葉書紙魚走る
捕虜の日に着し軍服や虫払ふ
遠き日の復員船や土用波

染み深き軍服いまに土用干
ラーゲルの役務の記憶天の川
シベリアも遠くなりけり天の川
捕虜のこと語らぬ友の終戦日
戦傷を引きずる余生走馬灯

ラーゲルに痛みし追憶ながれ星
ラーゲルの土に句を書く秋の夢
捕虜たりしノルマしみじみ冬銀河
雑炊やわれに捕虜の日の在りし
雑炊に異国の歌のおもいかな
初桜シベリア遺児の献花かな

(川柳) 十四句

初夢のさめてシベリアより帰還
軍歴は十日間です終戦日
新兵の早食い癖がまだ抜けぬ
パンの耳捨てて、捕虜の日は通し
ラーゲルの夢で食んでる米の飯
ラーゲルの黒パンの花火の味風化せず

シベリアの友に花火の鎮魂歌

ラーゲルの雪焼けいまに直らない

ラーゲルの真冬の役務風化せず

ラーゲルの雪の洗顔忘れない

ラーゲルの友の塚穴夢が掘る

捕虜たりし染みの葉書が捨てられず

赤紙の重さ知らない有事法

サマワ発大本営の音がする

(短歌) 三十四句

うすれゆく記憶の中にシベリアの三年におよぶ役

務忘れず

新兵のままシベリアのラーゲルに生きし三年今に

忘れず

武装解かれ貨車に起き臥し鉞掘りぬ彼の日夕日の

赤かりしかな

捕虜となりノルマに追われシベリアに生きし三年

今に忘れず

シベリアのツンドラの地に捕虜として生きし三年

も遙かになりぬ

捕虜となり貨車より見たるシベリアの大雪原を今

も忘れず

ラーゲルのソ連軍医は検診に臀部を見つつ「仕事

可」と言えり

ラーゲルに病むわれ雪を払いつつ友の塚穴掘りし

日忘れず

炭鉞のノルマを終えてラーゲルに帰る凍て月今も

忘れず

ラーゲルのソ連兵より受けし罵倒ゆめのなかにて

もまざまざ聞こゆ

半世紀経し夢にてもソ連兵のダワイベストリの叫

び聞こゆ

ラーゲルに逝きにし友を櫓に乗せ熱病むわれは手

綱引きたり

春の日の夢はラーゲルソ連兵ノルマ不足とわれを

威嚇す

ラーゲルのトロツク押しつつ流れ星仰ぎしことを

今も忘れず

春眠の夢にラーゲル監視塔の銃口を見てたじろぐ
われは

捕虜の日に吹雪く原野に電線の修理をせしも遙か
となりぬ

捕虜の日に雪をかきわけ松を伐りぬシベリアに在
りき二十歳のわれは

カンテラをかざし鉱石を掘りたりきシベリアにあ
りし二十歳のときは

熱に病みラーゲルの雪求めんと有刺鉄線にたじろ
ぎも遙か

俘虜の日にガラスで削り白樺の匙作りたる日もは
るかなり

ラーゲルにコックリさんの説信じ帰国夢見た日日
を忘れず

鉱掘りを終えラーゲルに戻る夢雪深き道に銃口光
る

ラーゲルの夜の使役に塚を掘る鶴嘴はじく凍土を
忘れず

捕虜たりし吾等一列はだかにて臀部検査を受けし

日はるか

君は永久（とわ）に二十歳なりシベリアの墓参か
なわぬ白樺の土に

ラーゲルの帰国名簿より外されし友の背中をいま
に忘れず

ナホトカより復員船に乗りしわれナースのねぎら
い今に忘れじ

シベリアにわが青春を捨てたりき捕虜なりし日を
今に忘れず

捕虜の日に着し軍服の虫払いシベリア想う若き日
を想う

シベリアの捕虜生活もはるかにて銀杯受くるも青
春はかえらず

シベリアより母に宛てたる捕虜用の葉書一枚虫干
しをする

点滴の窓の寒月に重ねつつトロッコ押ししラーゲ
ル思う

慰霊には行けぬシベリア捕虜の友凍土にねむり半
世紀過ぐ

シベリアに逝きにし慰霊の碑を囲み白髪の遺児献花しており

【執筆者の紹介】

執筆者は愛媛県東予市出身。

終戦当時、満州国平房の航空隊におり公主嶺、奉天を経て二十年八月末入ソする。重労働約二カ年、昭和二十二年六月無事復員して四国電力の社員となり、停年まで各営業所などに勤務する。

愛媛県のシベリア抑留慰霊碑の建立に際しては多額の寄付を賜り、現在地の高松市より（百六十キロ）、毎年五月の慰霊祭、総会と懇親会などに必ず出席している。

（愛媛県 山本 繁夫）

凍土の墓標

東京都 金井 秀雄

「入隊まで」

私は大正十（一九二一）年六月、上州高崎で生まれた。

当時高崎は商業都市であり、軍都でもあった。小学校は駅に程近い高崎南小学校であった。昭和六（一九三一）年満州事変が起こってから、高崎歩兵十五連隊の勇士が戦地に行く時もまた還る時も、先生に引率されて駅前通りに整列し、日の丸の小旗を振り万歳万歳と叫び送り迎えをした。子供心に、鬚面の凱旋兵士を迎える時は嬉しくて心もはずんだが、戦地に向う兵士を送る時は何か胸迫るものを感じた。出征部隊は連隊大手門を出ると、真っ直ぐ駅に向わず、郷土へのお別れの意味が大きく北に迂回、市内を行進してから駅に向った。潮風から守るためか全員、小銃を真っ白い包